Program

プログラム

モーツァルト:「羊飼いの娘セリメーヌ」による変奏曲 ト長調 K.359
Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791):Variations on La bergère Célimène in G major, K.359

ウェーバー:ソナタ 第6番 ハ長調 Op.10 J.104
Carl Maria von Weber (1786-1826):Sonata No.6 in C major, Op.10, J. 104

Ⅰ. Allegro con fuoco
Ⅱ. Largo
Ⅲ. Polacca

サン=サーンス:ロマンス 変ニ長調 Op.37
Camille Saint-Saëns (1835-1921):Romance in D-flat major, Op.37

ドップラー:ハンガリー田園幻想曲 Op.26
Franz Doppler (1821-1883):Fantaisie pastorale hongroise, Op.26

＊＊＊＊＊＊

サン=サーンス:抒情的小品(オデレット) Op.162
Camille Saint-Saëns (1835-1921):Odelette, Op. 162

フォーレ:幻想曲 Op.79
Gabriel Fauré (1845-1924):Fantaisie, Op.79

プーランク:フルート・ソナタ FP164
Francis Poulenc (1899-1963):Flute Sonata, FP164

Ⅰ. Allegro malinconico
Ⅱ. Cantilena
Ⅲ. Presto giocoso

フランク:ソナタ イ長調 M.8
César Franck (1822-1890):Sonata in A major, M.8

Ⅰ. Allegretto ben moderato
Ⅱ. Allegro
Ⅲ. Recitative: Fantasia
Ⅳ. Allegretto poco mosso

Program Notes
解説

10歳でフルートを始められ、昨年古希を迎えられた工藤重典さん。その演奏活動の範囲は、フルートが関わる、あるゆる音楽のジャンルに渡っています。中でもリサイタルの基本である、フルートとピアノのデュオは、やはりその核を成していて、常に最高のパートナー達と共に歩まれて来ました。近年はセシリアさんも加わって、より一層充実したプログラムが組まれるようになり、新たな可能性が広がっています。さて、デュオの形態について世界を見渡して見ると、兄弟や姉妹、夫婦の組み合わせは多々ありますが、以外なことに、本日のような親子というのは殆ど見当たりません。何よりこの幸せなデュオが続いているのも、個々の持つ、根源的な音楽に対する共感の部分で、お二人が繋がっているからこそなのでしょう。今回も、フルートとピアノが織り成すデュオの味わいを余すところなく伝える、実に魅力的なメニューになっています。

モーツァルト:「羊飼いの娘セリメーヌ」による変奏曲 ト長調 K.359

モーツァルトには、厳密な意味でのフルート・ソナタは存在していません。良く演奏される、旅先のロンドンで8歳の時に書かれた、6つのソナタも、元は鍵盤楽器が主役で、ヴァイオリンでも演奏可能なフルートパートはあくまでも助奏という形です。それを後世の演奏家達が、フルートを際立たせるための、様々なアレンジを試み、親しまれるようになりました。ただこれだけで飽き足らないのが、笛吹きの心理で、K.301のヴァイオリン・ソナタが、当初はフルートを想定していたという史実が判明すると、早速チャレンジが始まり、すでに1960年代には、工藤さんの師匠ランパルが、初のフルートによる、モーツァルトのヴァイオリン・ソナタ集を日本で録音しています。その後、楽譜の都合などで使い勝手が悪かったのですが、1992年に工藤さんの編曲による、全2巻のヴァイオリン・ソナタ集が出版されことにより、フルーティストの貴重なレパートリーとして定着しました。

「羊飼いの娘セリメーヌによる変奏曲」もピアノとヴァイオリンのためのもので、モーツァルトがウィーンに定住し始めたすぐの頃の25歳、1781年の作品です。フランスで仕入れたメロディーを基に、ピアノの弟子の伯爵夫人に捧げられた、12の愛らしい変奏曲ですが、至る所に天才モーツァルトならではの作曲技法の妙が散りばめられています。

ウェーバー:ソナタ 第6番 ハ長調 Op.10 J.104

オペラ「魔弾の射手」で知られるウェーバーは、昔の音楽室の肖像画にも必ず掲げられていた、ロマン派の先駆けとなる重要な作曲家で、モーツァルトと親戚関係にあることも注目に値します。フルート作品では、「フルートとチェロとピアノのためのトリオ」があり、こちらはロマン派の大作曲家のフルート曲に恵まれない中、現在でも頻繁に取り上げられ、その輝きを失っていません。さてこの「ソナタ」ですが、1810年、23歳のウェーバーは、出版社よりアマチュア用の6曲のヴァイオリン・ソナタの注文を受けました。それには「中程度の難しさで」という依頼があり、この微妙なニュアンスのためなのか、ウェーバーは作業に手こずり、その不満を日記にも書き残しています。しかも、出来上がった作品は、どうやら少しだけ難し過ぎたようで、何と突っ返されてしまい、別の出版社が肩代わりするという有様。このように曰く付きではありますが、すぐにフルート用の編曲も出版され、古典派からロマン派へ橋渡しをした、若きウェーバーの瑞々しい作品として称えられるようになりました。アマチュア用とは言え、ウェーバーの専門楽器のピアノも大活躍し、工藤さんも、海外のリサイタルでも積極的に取り上げて来られた、今では立派なコンサート・ピースとなっています。

サン=サーンス:ロマンス 変ニ長調 Op.37

サン=サーンスは音楽史上、モーツァルトにも匹敵する大天才で、音楽だけでなく、他の芸術や学問の分野でも、並外れた才能を発揮した、正に計り知れない人物です。サン=サーンスは、フルートのフレンチ・スクールを築き上げたタファネルと生涯に渡り深い親交があり、有名な「動物の謝肉祭」の初演でも、二人は共にしています。この「ロマンス」も、タファネルの演奏を想定して書かれたものと言われており、サン=サーンス自身もお気に入りの作品として、オーケストラ伴奏版も含め、タファネルとのコンビで繰り返し演奏された記録が残っています。作曲されたのは、1871年。時は普仏戦争、パリ・コミューンと混乱の真っ只中、避難先のロンドンで急きょ書き上げられました。曲はこうした背景とは裏腹に、フルートのレガートの美しさが香り立ち、工藤さんが教えを受けた巨匠モイーズも、著書の中でこの曲を修得する重要性を説いています。なお、サン=サーンスには、他にヴァイオリン、チェロ、ホルンのためなど、全部で6曲の「ロマンス」が存在し、その題名は、シューマン夫妻による作品名からの、インスピレーションとも言われています。

ドップラー:ハンガリー田園幻想曲 Op.26

弟のカールとのフルート・デュオで、ヨーロッパ中の喝采を浴びていた、フランツ・ドップラー。実はフルートヴィルトゥオーソとしてだけでなく、19世紀後半のウィーンの音楽界の重鎮として、ウィーン音楽院の教授を始め、宮廷管弦楽団の首席奏者、その後指揮者になり、現在のウィーン・フィルの創設にも関わりました。作曲に於いては、オペラやバレエなどの作品にも優れ、リストの「ハンガリー狂詩曲」の管弦楽アレンジでも知られています。「ハンガリー田園幻想曲」は、冒頭の部分が、日本の追分節を連想させることなどもあり、日本のフルート界では、黎明期より取り分け親しまれて来ました。工藤さんは、フランスのエラート社からのデビュー LPレコードをこの曲でスタートし、その後も、管弦楽や吹奏楽伴奏版などで録音を重ね、セシリアさんとの初共演CDの中にも含まれているなど、キャリアと共に歩まれた、この作品への想いが伝わります。。そして、他のドップラーのフルート作品も、兄弟での演奏を自作で賄っていた膨大な作品群を集めた録音に参加され、盟友のアリマニー氏と共に全集を完成させました。

サン=サーンス:抒情的小品(オデレット) Op.162

サン=サーンスは、当時のフランス領、北アフリカのアルジェリアの地を大変気に入り、何と19回も訪れ、「アルジェリア組曲」という管弦楽曲まで残しています。そして86歳の生涯も滞在先のアルジェリアで終えました。この「抒情的小品 オデレット」も、晩年の84歳の時に、アルジェリアの穏やかな環境の中で作曲され、タファネルの没後に活躍した名手ブランカールによって初演されています。オデレットという題名は、サン=サーンスの全くの造語で、大自然への畏敬の念が込められた、細やかな讃歌と言った意味のようです。この曲は、オーケストラ伴奏版もあり、名曲でありながら、何故か50年ほど前までは、あまり演奏されませんでした。しかし、近年では作曲者自身が、フルートのレパートリーに花を添えることになるだろうと予言した通り、頻繁に取り上げられるようになりました。

フォーレ：幻想曲　Op.79

サン=サーンスの後を継いだ、近代フランスを代表する作曲家フォーレは、特に歌曲の分野が名作の宝庫で、その寛容なスタイルは、パリ音楽院で育てたラヴェルたちに大きな影響を与えました。「幻想曲作品79」は、1905年に院長になる前の、1898年の教授時代に作曲されたパリ音楽院の卒業試験用の作品です。曲はゆったりと歌う前半と、技巧的な後半の2部構成という、伝統的な試験曲の形式に沿って書かれました。フォーレは、直接タファネルに、フルートについて相談しながら仕上げたせいもあり、トリッキーな所も見受けられますが、そこはさすが大作曲家。単なる審査曲に終わらず、永遠のレパートリーとして、エネスコの「カンタービレとプレスト」と共に、過去の卒業試験曲の頂点にそびえ立っています。なおこの時、同時に初見視奏曲も、フォーレが作曲していて、こちらも珠玉の小品として現代に蘇り、工藤さんの愛奏曲の一つとなりました。因みにこの年の1等賞の卒業生は、前曲「オデレット」の初演者、ブランカールです。

プーランク：フルート・ソナタ　FP164

終生、無調音楽とは無縁のスタイルを貫き通した、フランス「6人組」の一人、プーランク。「フルート・ソナタ」は、プーランクの代表作であるばかりでなく、プロコフィエフのOp.94と共に、20世紀の2大フルート・ソナタと呼ばれています。実際、この曲をレパートリーにしないフルーティストはいない位、聴き手にも演奏者にも大人気の作品です。成立の過程で初演者のランパルは、何度もプーランクの自宅に出向き、意見交換や試奏を繰り返しました。半ば共同作業のようにして出来上がったソナタは、1957年6月18日にストラスブールの音楽祭でお披露目され、大成功を収めました。そして本当の初演は、前日に大ホールの最前列の真ん中に座った、大ピアニスト、ルービンシュタイン、一人だけのために行われたという、感動的な話しもあります。さて、この曲の楽譜についてですが、初版譜やその他、いくつかの版が混在して、不明な点が長く浮き彫りになっていましたが、工藤さんが貴重な自筆譜や断片を基に、整理された完全版を出版し、現在では演奏上の問題がクリアになりました。

フランク：ソナタ　イ長調　M.8

19世紀後半のパリで活躍した、ベルギーの国民的作曲家フランクの代表作「ソナタ イ長調」は、同郷の友人の大ヴァイオリニスト、イザイの結婚式のために書かれました。お目出たい席の作品とは言え、フランクお得意の循環形式を用いた重厚な佇まいで、古今のヴァイオリン音楽の至宝と言われています。チェロやフルートでも頻繁に演奏され、工藤さんによると、最初の音出しは、フルートで行われたという話もあるそうです。1979年、センセーショナルなデビューとなった、工藤さんの第1回目のリサイタルのメインがこのソナタでした。そしてある時から、「これからは、よほど準備が整わない限り、フランクは演奏できない」と仰る位になった大事なレパートリー。本日は、それぞれの曲の、本質に迫る響きの世界を築き上げる、セシリアさんのピアノと共に、60年めからの、また新たな道のりが始まります。

文：秋山 君彦

Shigenori Kudo, Flute

工藤 重典（フルート）

国際的に活躍を続けるフルーティスト工藤重典は、1979年にパリ国立高等音楽院を一等賞で卒業、恩師JPランパルに認められ世界各地で演奏活動を行う。
シャンゼリゼ劇場、サル・プレイエル、ウィーン楽友協会、ミラノ・スカラ座、サントリーホール、などヨーロッパ、オセアニア、アフリカ、南北アメリカ大陸、アジアなど世界の百数十都市でソリストとして演奏してきた。92年よりサイトウキネン・オーケストラと水戸室内管弦楽団で首席奏者、オーケストラ・アンサンブル金沢で特任首席奏者を歴任。
東京音楽大学教授、昭和音楽大学客員教授として後進の指導にもあたっている。
文化庁芸術祭賞、京都芸術祭賞、村松賞、仏オベルネ名誉市民賞などの受賞の他、2024年イタリアフルート協会より「洗練された演奏、マルセイユ楽し派の輝かしいフルート主義の伝統の相続人、彼の芸術で最初にフランス、そして全世界を魅了した」として生涯功労賞を受賞した。

Cécilia Kudo, Piano

工藤 セシリア（ピアノ）

フランス生まれ。4才よりピアノを始め、幼少の頃よりフランス国内にて、多くのコンクールに参加、その多くを最高位第1位を獲得している。
8才よりコンサートを始め、東京、札幌、横浜、浜松、佐賀、ビル・ダブレ城、サンテミリオン音楽祭、ラジオフランス、ほかシンガポール、ロシア、韓国、台湾、中国などで、リサイタル、室内楽を父親工藤重典、他の音楽家と行う。
2014年にソロCD「オマージュ・ア・ドビュッシー」、2015年に工藤重典氏との『ウィーンの薫り～フルート・ソナタ集』と『アンコール』を続けてリリースし、レコード芸術特撰に選ばれる。
2017年よりシリーズをサロン・ランパルに於いて室内楽シリーズ「セシリアの部屋」を開催している。

各公演の**アンコール曲**は、**ホワイエでの掲示**の他
←順次こちらに掲載しております。

皆様のご来場の記念に

（プログラム最後の曲が終わった後）

カーテンコール中に限り

舞台上の演奏者を撮影する「特別タイム」

禁止事項

- **動画撮影**　・**演奏中の写真撮影**（演奏者から許可があった場合を除く）
- フラッシュの使用　・自席からの移動　・立ち上がっての撮影
- 手を高く上げての撮影など、周りのお客様のご迷惑になる行為

上記の他、SNSへの利用の際は、周りのお客様のうつりこみにもご配慮ください

「特別タイム」は、皆様の周りへの「思いやり」と「配慮」のもと運営しております。
ご協力をお願い致します。

お互いに気持ちよく演奏を楽しむために

★**携帯電話は音や振動が出ない設定に。**
★**大きな声での会話は、ホワイエで。**座席では静かにお過ごしください。
★拍手は、１曲全てが完全に終わるまでお待ち下さい。余韻を大切に。
★演奏中の物音にご配慮を。
- プログラムやチラシをめくる音、膝から床に落とす音
- 飴やティッシュ、ハンカチを取り出す音
- キーホルダーやストラップについた鈴の音
- ビニール袋などのガサガサ音

鑑賞中に体調に異変を感じた場合は、演奏中でも遠慮なく最寄のドアからご退出ください。
お近くのお客様のご理解・ご協力をお願いいたします。

・館内各所にアルコール消毒液を設置しております。手指消毒にご利用ください。

2024-2025は演奏活動60年

Congratulations 60th Anniversary ～フルートと共に60年～

工藤 重典

フルート・リサイタル
～フルートと共に60年～

2025年 4月 6日（日）14:00開演
主催：宗次ホール